一　遺跡の位置と環境

塩井社遺跡は熊本県阿蘇郡西原村大字小森にある。

阿蘇南郷谷から西へ流れて、有明海に注いでいる白川の南側には白水、小山の二段の台地がある。西原村はその台地の東側に位置しており、阿蘇外輪山の西麓にあたる。

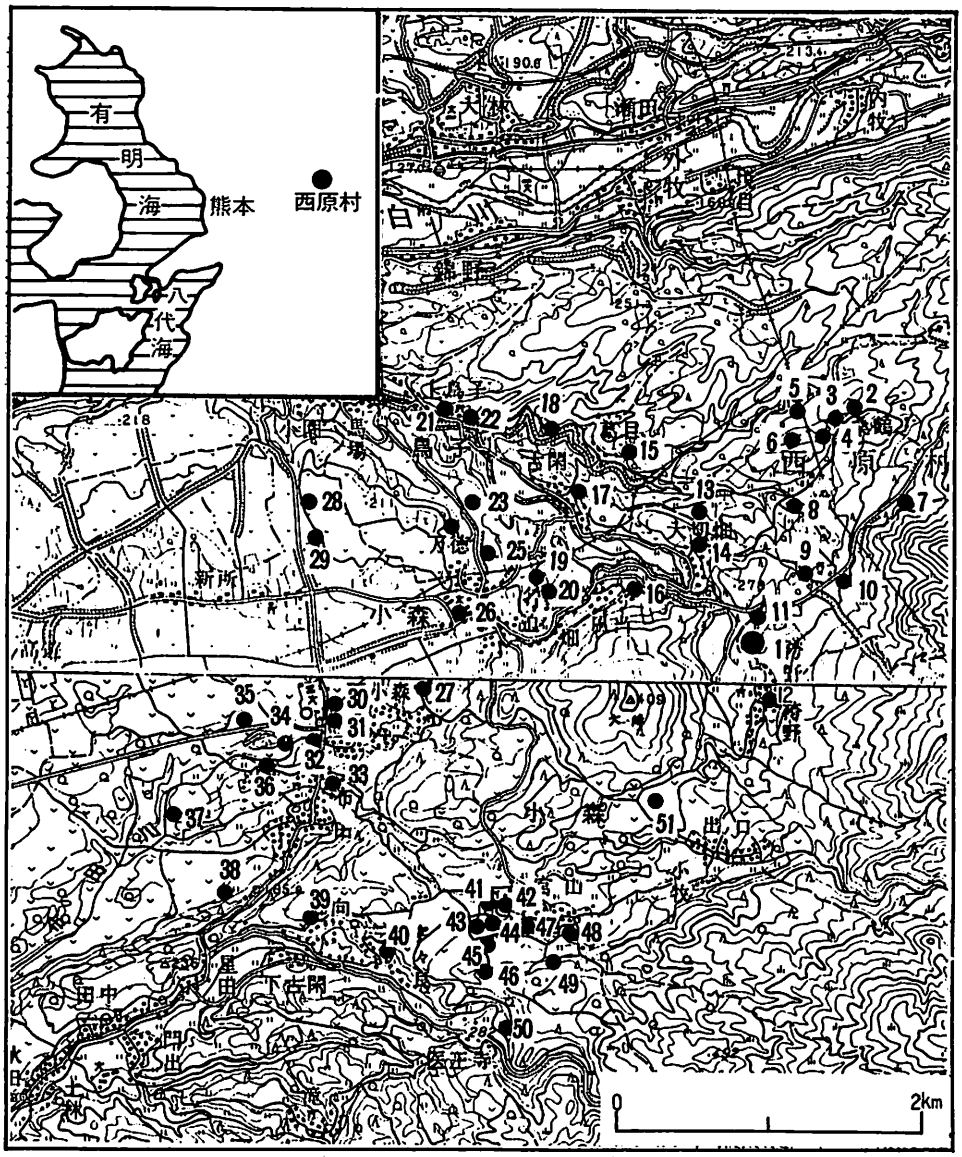
西原村は鳥子川流域と木山川流域との二つの地域に分けられる。鳥子川、木山川及びその支流によって開析された地域には、先土器・縄文・弥生・古墳の各時期の遺跡が密集して存在し、脊梁山地における文化の展開を考察するのに貴重な資料源となっている[註](第１図)。

塩井社遺跡は、大峰（409ｍ）と俵山（1,095ｍ）西斜面とにはさまれた大切畑ダムの東側に位置している。発掘区の標高は約276ｍである。発掘区の周辺は平坦であり、牧草地や桑畑などに利用されている。しかし、発掘区の北側は小さな谷であった形跡をとどめており、付近全体の旧地形は、俵山が北西側に緩やかに傾斜しながらのびた面積10,000㎡ほどの舌状の台地であったと推定される（第２図；図版１）。

発掘区（第１地点）の南側約300ｍの塩井神社とその東側上方には盛んな湧水が見られ、下方一帯の水田をうるおしながら大切畑ダムに注いでいる。湧水点近くの水底からは摩滅した縄文土器・弥生土器・石器が採集できる（第４地点)。その他に、発掘区の北側約100ｍの桑畑からは弥生土器が採集できる（第２地点)。また、発掘区の南東約500ｍの畑からは縄文土器・石器・弥生土器が採集できる（第３地点)。

湧水地点を含み、発掘区を取り囲む状態で位置している第２地点・第３地点・第４地点は発掘区と同時期の遺物が採集できる。また、第２地点・第３地点は地勢に改変が加えられる前から、発掘区が位置しているのと同じ台地上にあったと推定される。第１地点・第２地点・第３地点・第４地点は相互に関連あるものとして考えたい。　（西住）

註　『桑鶴土橋遺跡(2)』　熊本大学文学部考古学研究室　1979



第１図　塩井社遺跡位置図

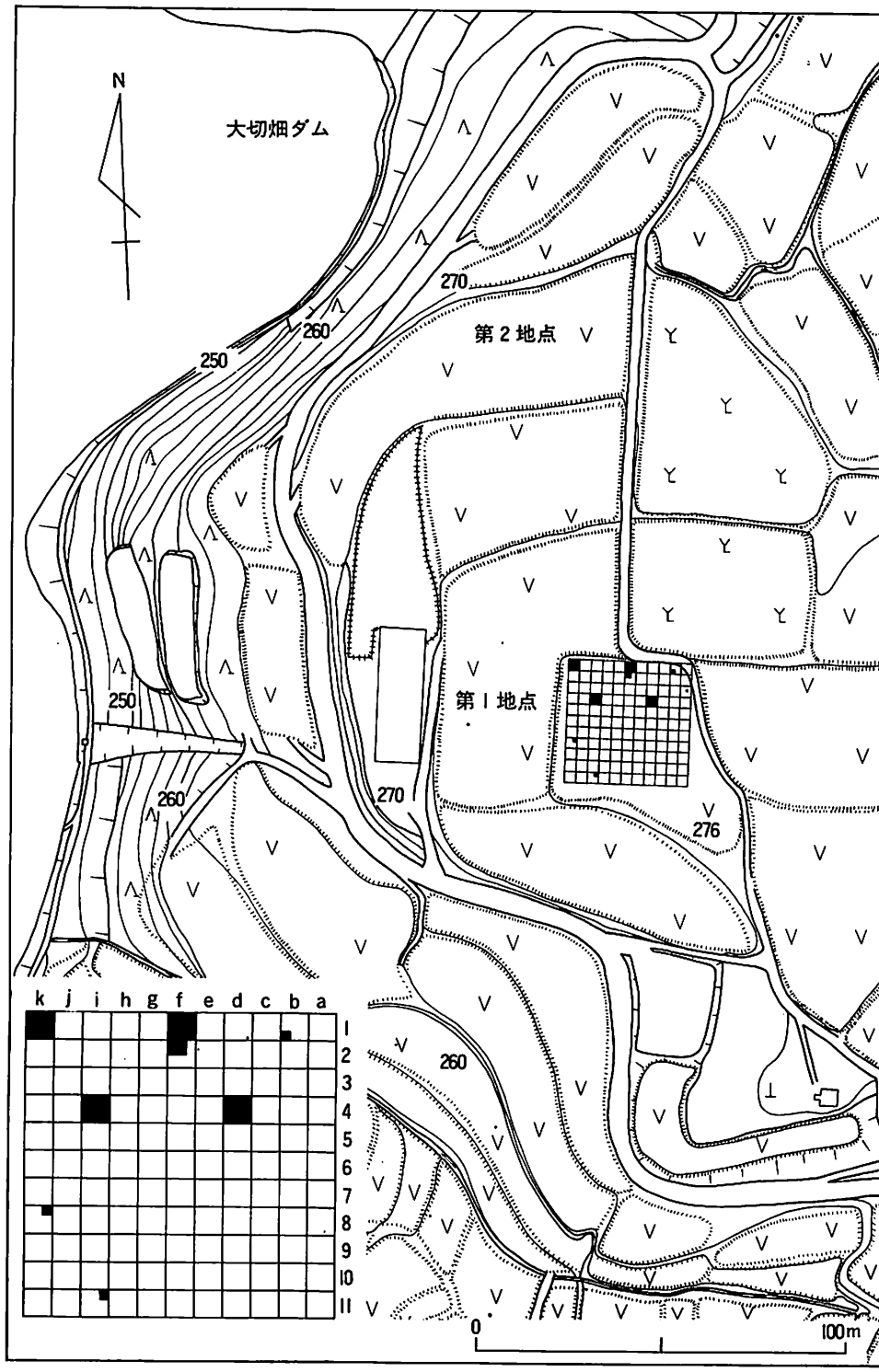
1. 塩井社　2. 上桑鶴　3. 古屋敷　4. 本屋敷　5. ひなだめ　6. 下桑鶴　7. 古池　8. 桑鶴土橋　9, お池　10. うっさい　11. どや堤の上　12. 袴野　13. 後迫　14. 大切畑　15. 葛目　16. 風当　17. 古閑　18. 葛目横穴　19. 狐塚古墳　20. 狐塚石棺群　21. 陳ノ上　22. 鳥子神社　23. 襟ノ平　24. 風森　25. 桃木原　26. がくが峰　27. 下小森　28. 新所東上ノ原　29. 涼み塚　30. 小東　31. 田迎　32. 別辻　33. 恵良　34. 玉ノ迫　35. 山ノ神　36. まち　37. あかどう石棺群　38. 下布田石棺群　39. 日向上ノ原　40. 多々良　41. 宮山神社　42. にれやま石棺群　43. 牟田　44. ぬきや　45. ならぎ　46. 多々良上　47. なこやしき　48. 鬼太郎　49. ひろせ　50. 医王寺　51. 出ノ口

二　調査の目的と経過

考古学研究室では、これまで「九州脊梁山地における先史文化の展開」というテーマの下に、西原村内に所在する先史遺跡の継続的な発掘を行なってきた。中でも昨年まで２回に亘って発掘調査を実施した桑鶴土橋遺跡では、曾畑式土器を中心とする遺構・遺物群が出土し、山地における生活形態の一端を明らかにすることができた。今回は遺跡相互間の関係も含め、さらに山地における先史文化の在り方を検討するため、これまで地元の研究者によって石鏃や石匙などが表採され注目されていた塩井社遺跡の発掘調査を行なうことにした。塩井社遺跡は、これまで正式な調査がなされておらず、不明な点が多かったからである。

発掘調査は、昭和55年３月27日から４月４日に亘って実施された。踏査結果をもとに、最も条件の良さそうな台地中央部の牧草地を中心に発掘区を設定し、３ｍ方眼の座標を組んだ。台地周辺には他にも遺物の出土する地点があり、台地中央部が広い遺跡群の１地点に当る可能性があるので、各座標には東から西に小文字のアルファベットを、北から南に算用数字を付して将来の広域調査に備えた。また付近をスタジア測量によって実測し、750分の１の地形図を作成した。

初めｄ－４・ｉ－４区を掘り下げ、次いでｆ－１・ｋ－１区を掘り下げた。ｄ－４・ｉ－４区はローム面まで浅く、現地形の上部はいくらか削平されている様子であった。ｆ－１・ｋ－１区Ⅳ層では礫が分布しており、特にｆ－１区では集石が検出されたため、その性格を確認すべくｆ－２区北側半分を拡張して掘り下げた。ｄ－４・ｉ－４・ｋ－１区の調査終了後、遺跡の広がりや土層の堆積状態を確認するため、ｂ－１・ｉ－11・ｋ－８区にそれぞれ１×１ｍの試掘ピットを入れた。ｉ－11・ｋ－８区では地表下50cm程度でローム層に達し、遺物包含層は全く存在しなかった。発掘の結果から、台地中央部の上層は北側にわずかに傾斜しており、遺物包含層は北側に向って漸次厚さを増すものと推定された。(下村)



第2図　塩井社遺跡地形実測図

三　調査結果の概要

1　層序〔第３図；図版２上〕

塩井社遺跡は北へのびる台地上に立地するため、土層全体は北側へ傾斜している。そのために北側の土層がやや厚い。遺跡の基本的層序は調査区北側のｆ区で確認された。ｆ区ではＶ層まで区分できた。

Ｉ層　厚さ５～26cmで灰黒色をした耕作土である。耕作によって粉砕された土器片を少量含んでいる。

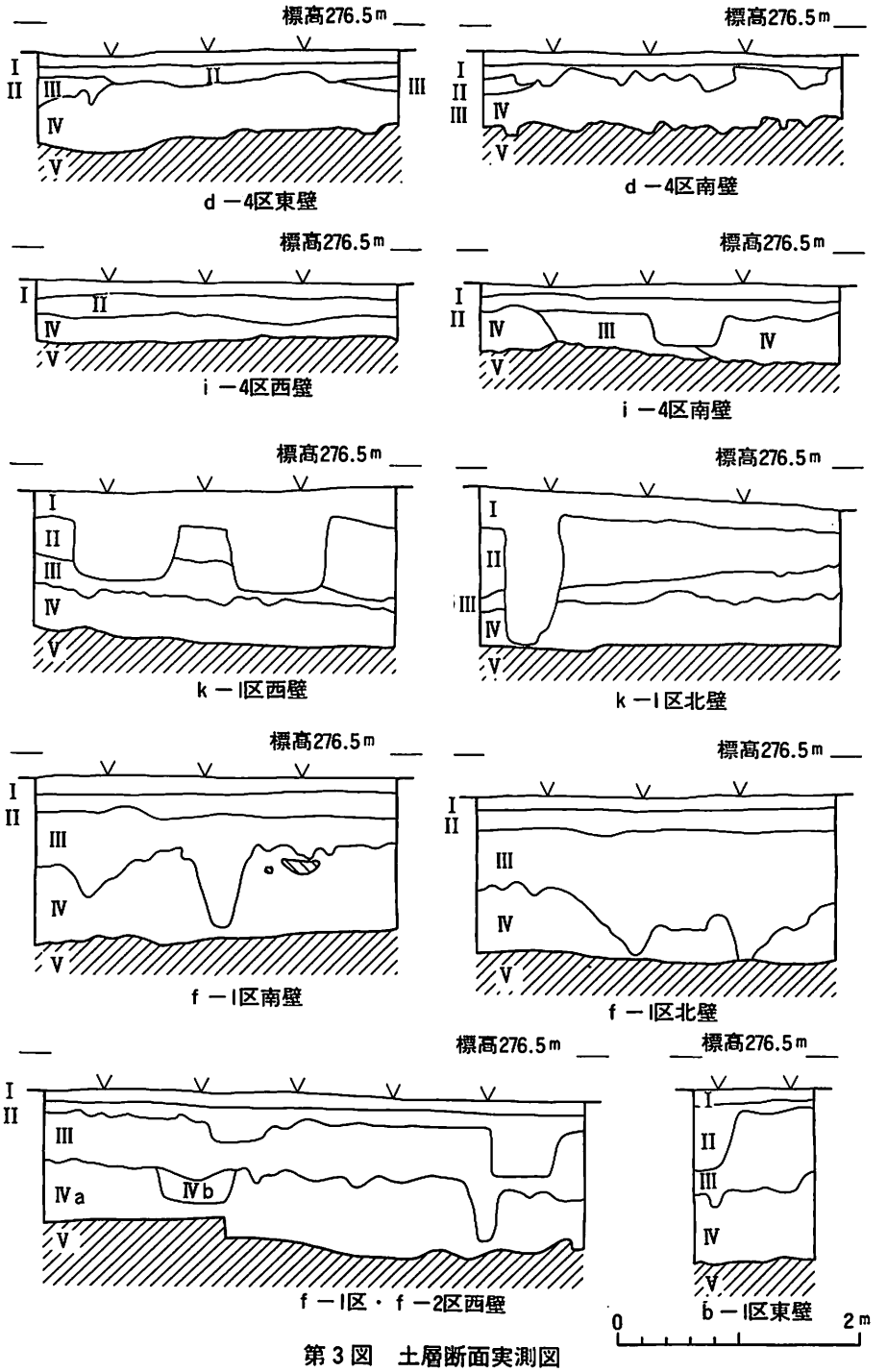
II層　暗褐色を呈する厚さ５～59cmの砂質土層である。攪乱を受けており、縄文後晩期の磨研土器・弥生土器・石鏃・石匙などが出土している。

III層　黄褐色の砂質土層である。厚さ９～82cm。地形が北側へ傾斜しているために調査区南側のｄ－４・ｉ－４区ではIII層が一部消失している。ｂ－１・ｆ－１区ではIII層上部にやや黒味を帯びた弱粘質土が部分的に認められた。晩期の磨研土器・弥生土器が出土し、攪乱を受けたものと推定された。しかし、III層との境が漸移的であり、III層と区分するまでにはいたらなかった。また、各発掘区のIII層下部に鶉卵大の黄色パミスが部分的に認められた。押型文土器・条痕文土器・沈線文土器・縄文土器・石鏃・石匙などが出土している。

Ⅳ層　黒色の粘質土で厚さ20～76cmを測る。ロームをブロック状に含む部分（Ⅳｂ層）と含まない部分（Ⅳａ層）に分けられる。ｆ－１区では安山岩の集石遺構がⅣａ層の上部から検出された。Ⅳｂ層はｆ－２区北西部で集石遺構の広がりを切る土壙に伴うものと考えられ、Ⅳ層上面からの落ち込みであることから人為的なものと推定された。押型文土器・条痕文土器・沈線文土器・石鏃・石匙などが出土している。

Ｖ層　明褐色の粘質ローム層である。出土遺物なし。

さらに、付近の崖面観察によりＶ層の下に灰黒色粘質土層、その下位に黄褐色ローム層の堆積が確認できた。なお、Ｖ層以下は無遺物層である。　（永田）

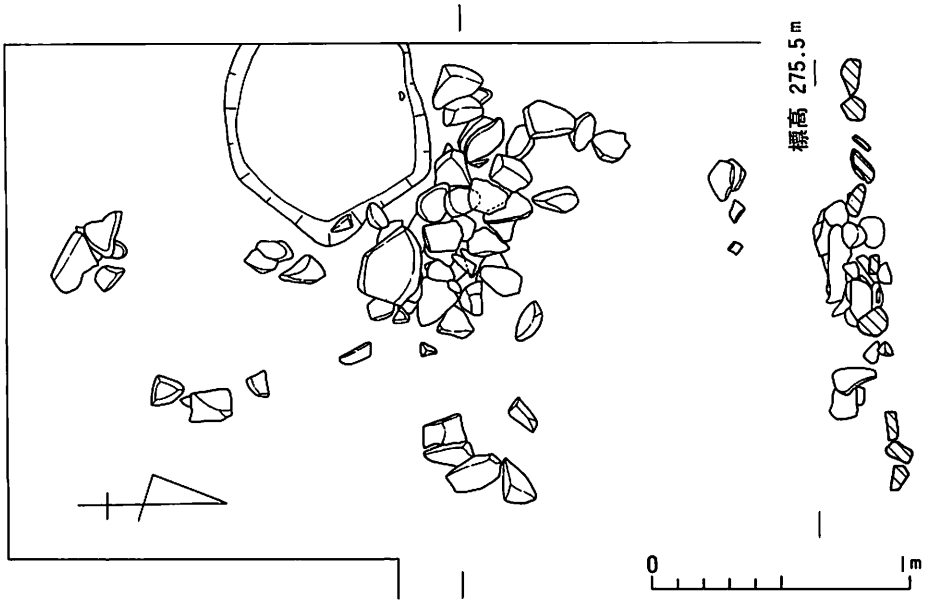

標高276.5m
d－4区東壁
d－4区南壁
i－4区西壁
i－4区南壁
k－I区西壁
k－I区北壁
f－I区南壁
f－I区北壁
f－I区・f－2区西壁
b－I区東壁
0
2m

第3図　土層断面実測図

2　集石遺構〔第４図；図版３〕

ｆ－１区の南壁沿いに集石遺構が検出された。集石の広がりを確認するためにグリッドをf—2区まで拡張したが、集石はセクションベルトの下でとまっていることが確認された。集石はⅣ層上部に位置し、総数は75個を数える。殆どが安山岩で、火熱は受けていない。礫は20cm台の大きなものもあるが、殆ど10cm内外のものである。集石はf—2区北側の25×30cmの石皿状の石を頂点として北西方向へのびている。集石の範囲は東西約110cm、南北約70cmで、高さ約30cmを測る。石皿状の石を中心に礫が集中し、その下部には放射状のしっかりとした石積みが確認された。石積みは下部に小さめな礫を、上部に比較的大きな礫を用いてある。更に、石皿状の石を中心とした同心円上にも４、５個ずつの礫が散在している。集石に伴う遺物、集石下部の遺構は検出されなかった。

また、集石遺構の南西部からf—2区西壁にかけて径約80cm、深さ約５cmの土壙が検出された。土壙に沿って集石が存在すること、f—2区西壁のⅣb層が土壙に伴うことから集石遺構埋没後の掘り込みと推定された。　　（永田）



第４図　集石遺構実測図

3　出土遺物〈縄文土器〉　〔第５・６図；図版４〕

押型文土器（１～５）　すべて山形であり、Ⅲ層・Ⅳ層より多く出土している。１を除いては、やや間のびした大ぶりな山形施文の手向山式土器で、５は刺突文を持つ縦方向の突帯を境に押型文と沈線文の文様帯に区分される。

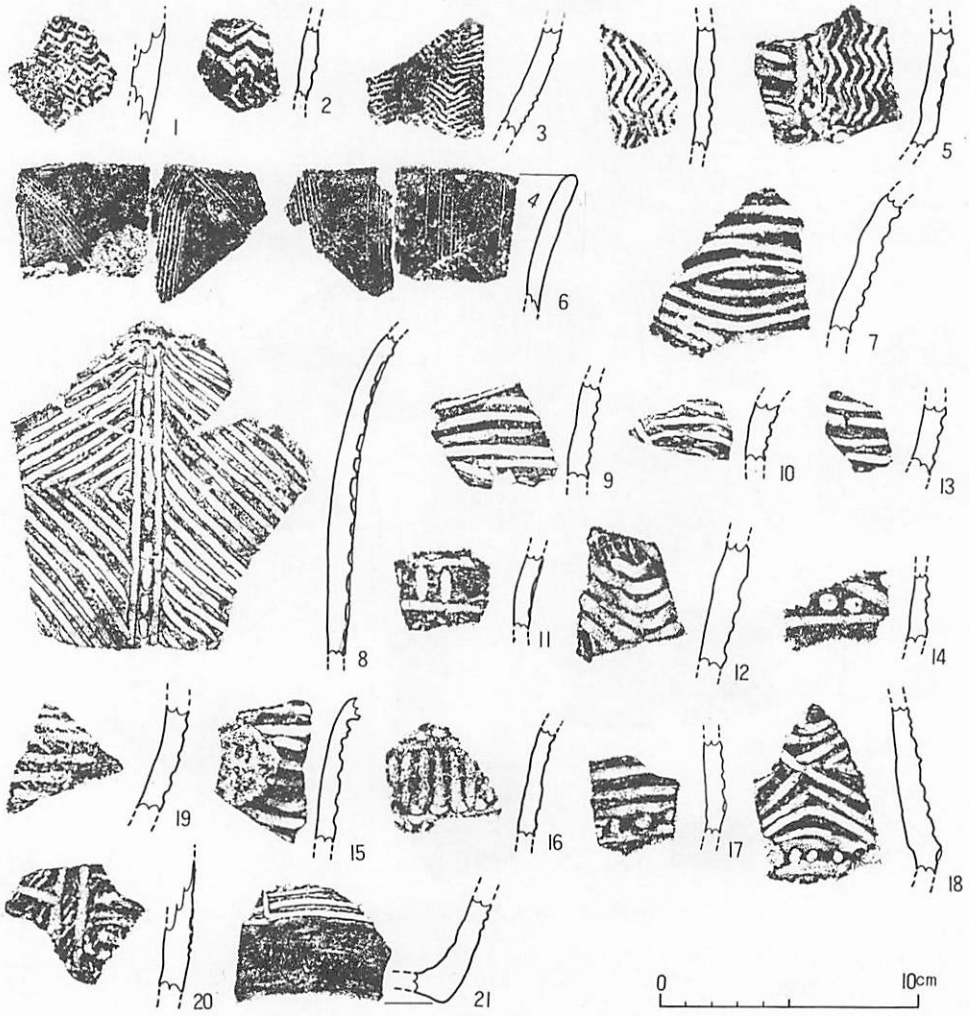
沈線文土器（６～21）　出土した土器の約⅓を占める。施文具により３種に分類される。a類は櫛状の施文具を用い、６は７条を単位とした細沈線を、外器面は斜方向、内器面は縦方向に施している。外器面・内器面ともナデ調整で、胴部が張り頸部がくびれて口縁がやや外反する深鉢形の土器である。b類は細い棒状の施文具で幅３㎜程度のシャープな直線を描いたもので、８は胎土にやや砂粒を含み、外器面・内器面ともナデ調整を施す。器形は口縁部がやや外反する深鉢形で、胴部は軽く屈曲して上げ底気味の底部に続くと思われる。c類は棒状の施文具で幅３～６㎜の直線・曲線を描いたもので、刺突のある突帯を有するもの（17・18）、刺突文を持つもの（14・16）、撚糸文を地文としたもの（19・20）などがある。21はやや上げ底気味の底部で、胎土は細砂を含み、外器面・内器面とも丁寧なナデ調整で焼成も良い。６～20は沈線文を主体とした手向山式土器であるが、21は塞ノ神式土器の底部と推定される。

条痕文土器（22～30）　内器面・外器面ともに条痕のあるもの（22～28）と外器面のみに条痕のあるもの（29・30）がある。22～26・29・30は貝殻条痕と思われ、26は外器面に条痕を施した後、指で調整して小突帯を作っている。また、24は貼付突帯を持つ。

縄文土器（31～50）　出土土器の約⅓を占め、多くはⅢ層より出土している。ほとんどが撚りの粗い縦方向の縄文を施してあり、横方向の縄文は38だけである。31・32は口縁部で、口唇部は平坦でやや内傾している。31は内器面にも縄文を施文している。単純な原体回転の縄文と、回転に強弱をつけて条を描き出したもの（43・44）がある。47は内器面に条痕が残るが、他はナデ調整で、堅くて器壁の薄いものと、ややもろくて器壁の厚いものがある。突帯には幅の狭

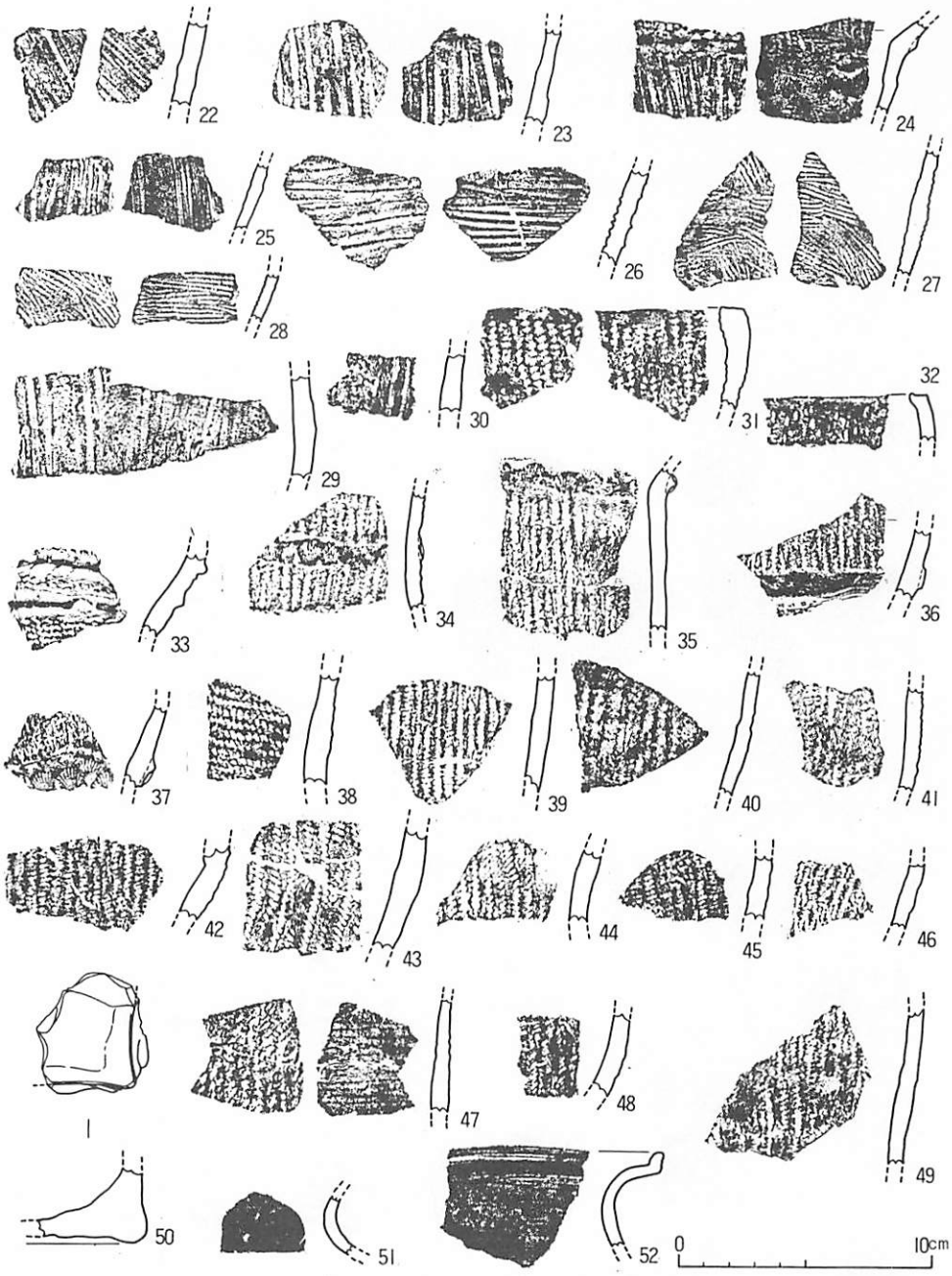
いシャープなもの(33)と幅広の薄い粘土ひもを貼りつけたもの(34～37)があり、後者には貝殻頂部の圧痕を有するもの（34・35・37）がある。50はやや上げ底気味の四角な土器底部で、製作痕の残る粗雑な作りである。全体的な器形は、破片から推定すればキャリパー形になるものと考えられる。

黒色磨研土器（51・52）　数片の出土で、うち51は浅鉢の頸部、52は口縁部で内器面・外器面ともよく磨研され、焼成も良い。　（宮本）



第５図　縄文土器実測図(1)

１・３・８；ｄ－４区Ⅳ層，　２・７；ｄ－４区Ⅱ～Ⅲ層，　４・10・21；ｆ－１区Ⅳ層，　５；ｆ－１区・ｆ－２区間セクションベルトⅣ層，　６・９；ｆ－１区Ⅲ層，　11；ｆ－２区Ⅲ層，　12～14；ｋ－１区Ⅲ層，　15・16・18；ｉ－４区Ⅲ層，　17；ｂ－１区Ⅱ層，　20；ｋ－１区Ⅳ層



第６図　縄文土器実測図(2)

22・24・30；ｄ－4 区Ⅱ～Ⅲ層，　23・52；ｉ－４区層不明，　25・43～45；ｆ－１区・ｆ－２区間セクションベルトⅢ層，　26；ｆ－１区Ⅳ層，　27・41；ｆ－２区Ⅲ層，　28・32；ｉ－４区Ⅳ層，29・51；ｉ－４区Ⅱ層，　31・46～49；ｉ－４区Ⅲ層，　33・38；ｂ－１区Ⅱ層，　34・35；ｋ－１区Ⅱ層，　36・39；ｆ－１区Ⅲ層，　37；ｆ－２区層不明，　40；ｆ－２区Ⅱ層，　42；ｆ－１区・ｆ－２区間セクションベルトⅡ層，　50；表採(底面)

〈石器〉　〔第７図；図版５下〕

出土した石器は石鏃６点、石匙４点で、その他剥片・砕片を含めると60余点に上る。出土層別にみると、Ⅱ層とⅢ層に多いがⅣ層にも同数程度出土している。

打製石鏃（１～５）　１はⅡ層、２～４はⅢ層、５はⅣ層から出土した。

1．安山岩製の有茎鏃。全体は菱形を呈し先端は鋭い。調整剥離は周囲から行なわれているが、雑で粗い部分もある。長さ3.0cm 幅1.1cm。

2．玄武岩質安山岩製。風化が激しく全面に及ぶ。長さ2.0cm 幅(推定)1.4cm。

3．玄武岩質安山岩製。抉入部の長さが全長の¼程度。やや扁平で刃部の加工は粗く、また先端の鋭利さを欠く。長さ2.2cm 幅1.5cm。

4．安山岩製。基部欠失。二次加工が粗く、やや扁平である。有茎鏃の折損したものである可能性もあるが、いずれにせよ加工の状態や形態から、未成品であろう。現存長3.1cm 幅1.5cm。

5．黒曜石製。二次加工は精緻で先端鋭利、抉入部が全長の約⅓に及ぶ。いわゆる鍬形鏃に類似する。長さ2.5cm 幅(推定) 2.1cm。

石匙（６～９）　６はⅡ層、７・８はⅢ層、９はⅣ層上部から出土し、全て安山岩製である。

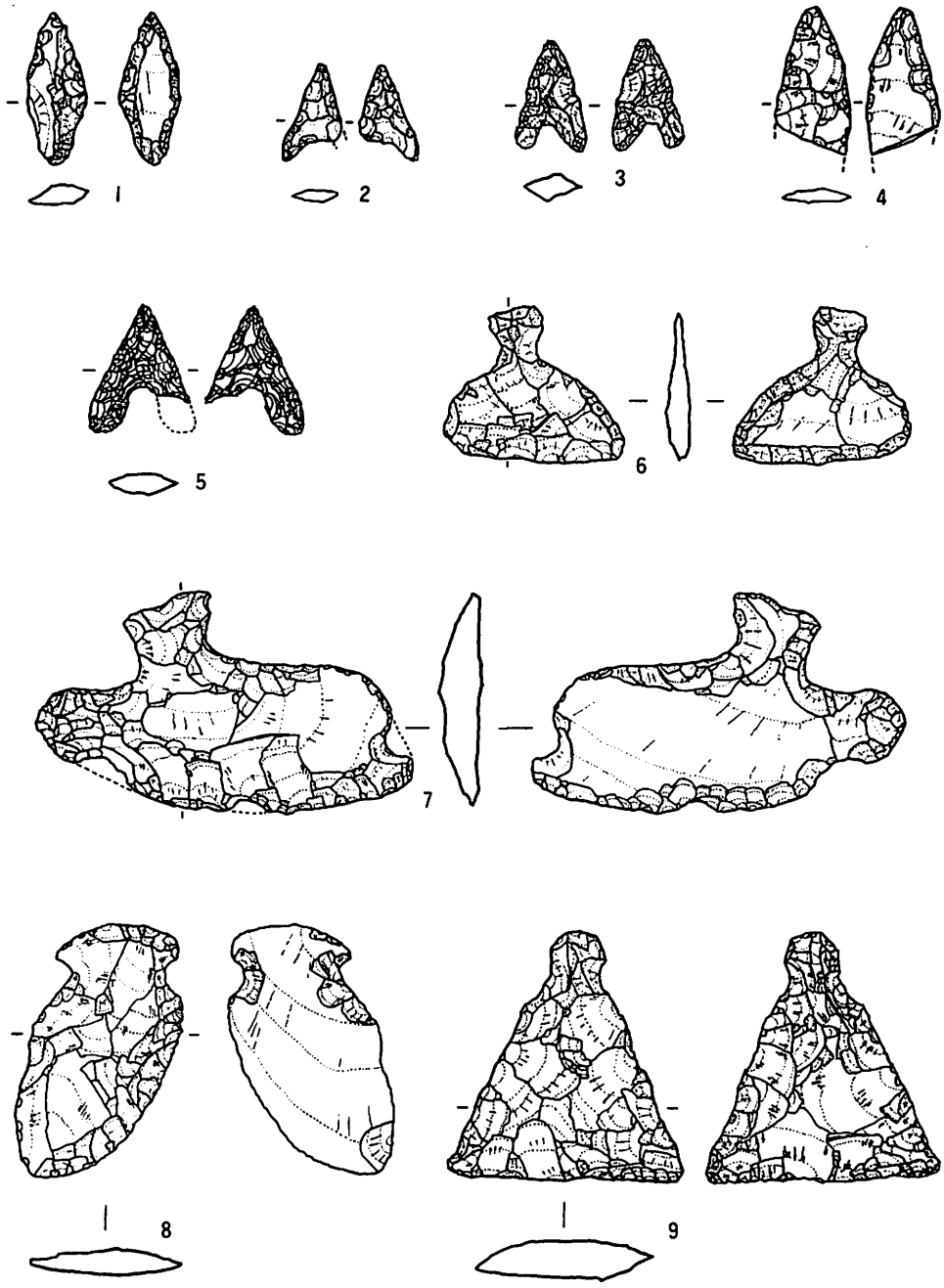
6．横型。小型で薄い剥片を使用し、主要剥離面の調整には急角度の剥離が施されている。刃部は幾分外彎する。高さ3.1cm 幅3.6cm。

7．横型。横長の剥片を用い周縁に加工を施す。刃部は外彎し大形のつまみがつく。３箇所に破損部がある。高さ4.5cm 幅7.5cm。

8．縦型。加工はやや粗く、太めのつまみがつく。刃部加工は主要剥離面から施されている。高さ5.1cm 幅3.3cm。

9．縦型。整った三角形を呈し、全体的に入念な調整加工が施されている。断面中央部は厚く刃部は直線的で鋭い。つまみ部の抉りは浅い。高さ5.0cm 幅4.7cm。

（吉永）

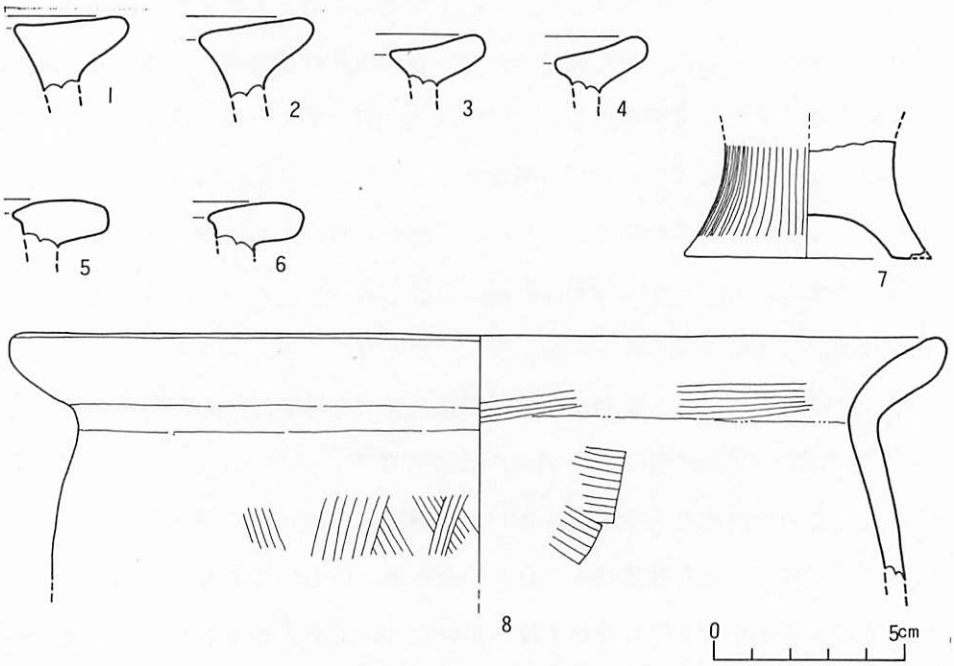


第７図　石器実測図

１；ｋ－１区Ⅱ層，　２；ｆ－１区Ⅲ層，　３；ｆ－２区Ⅲ層，　４；ｉ－４区Ⅲ層，
５；ｆ－１区Ⅳ層，　６；ｋ－１区Ⅱ層，　７；ｄ－４区Ⅲ層，　８；ｆ－１区Ⅲ層，
９；ｉ－４区Ⅳ層

〈弥生土器〉　〔第８図；図版５上〕

弥生土器は各発掘区のII層及びIII層上部から計10余点出土した。いずれも口縁部などの小破片であり、完形或いはそれに近いものは出土せず、また出土の状態にまとまりはない。１～８はいずれも甕形土器の破片である。口縁部は形態により４種類に分類できる。（１）１・２は平坦口縁でわずかに内傾する。外側は丸味をもち、内側への張り出しは小さい。（２）３・４は口縁上部がやや凹み、外側は丸味をもち内側へ強く張り出す。（３）５・６は口縁上部が丸味をもち、外側はやや角張る。（４）８は外反する口縁で胴部の厚さよりやや厚く、口唇部は丸味をもつ。胴部は長胴形になると思われる。７は台脚状の底部である。脚の下面は平坦でよく接地し、その縁は比較的シャープである。脚の内側の凹みはあまり深くはなく皿状を呈する。以上、１～７は中期的特徴をそなえ、８は終末期の野辺田式土器に類似する。　（吉永）



第８図　弥生土器実測図

１・２・７；f－１区II層，　３・４；k－１区III層，　５・６；f－２区III層，　８；b－１区III層

四　まとめ

以上述べてきたように、塩井社遺跡ではこれまで出土状態が不明であった手向山式土器や船元式土器が中心に出土し、桑鶴遺跡群とはやや様相に異なるところがある。遺物の出土状況をみると、Ⅲ層下部からⅣ層にかけて主に手向山式土器が、Ⅲ層からは条痕文土器や船元式土器が出土した。Ⅲ層上部の攪乱部やⅡ層などからは、縄文晩期の磨研土器や弥生中・後期の遺物が少量ながら出土し、永い時間に亘る人々の生活の痕跡が認められた。

ところで、手向山式土器については、これまで谷頭遺跡で刻目突帯と押型文を併用した土器が出土しており、塩井社遺跡では刻目突帯と沈線文を組み合わせるタイプが多く出土している。両遺跡共に塞ノ神式土器などを併出し、押型文土器文化特有の集石なども伴っている。手向山式土器は従来縄文前期中葉に位置付けられていたが、出土状態などから早期末か前期初頭に位置付けられると考えられる。一方、船元式土器は、古く竹崎式土器とも呼ばれ、西原村内の別辻・本屋敷・古池遺跡から発見されている。塩井社遺跡出土の場合は、縄文施文のもの、それに突帯を付し、一部にはアナダラ属の貝頂で押圧を施すものが中心となる。器形はキャリパー形をとると思われ、底部に稜を持つものもみられる。そのほか石器の組成としては、以前から石鏃と石匙が注意されており、今回の調査でもトゥールの殆どは石鏃と石匙であった。石匙の比重の大きさは塩井社遺跡の生産手段の在り方を示唆しているものと考えられる。

塩井社遺跡周辺には、手向山式土器や塞ノ神式土器をはじめ、各種の縄文土器や弥生土器・土師器が出土する遺跡が数箇所存在する。これらの遺跡群は「塩井さん」という湧水点を中心に分布し、相補完して時代的に継続しているように見受けられる。塩井社遺跡もこれらの遺跡群のひとつであるが、石器の組成から推すとキルサイト的な性格を持っていたものであるかも知れない。塩井社遺跡の発掘結果は、俵山山麓の多数の湧水点をめぐって密集する遺跡群の在り方を検討する際の基礎資料のひとつであろう。　　（下村）

付１　塩井社周辺遺跡

塩井社遺跡周辺には、まとまって遺物の出土する地点が３箇所（第２～４地点）あり、多数の表採資料が得られた。

〈縄文土器〉〔第９図・第10図19～35；図版６下〕

１は山形施文の押型文土器である。２～４は手向山式土器で、２は口唇部表裏に間のびした山形押型文を施文し、３は刻目突帯文、４は沈線文を施す。５・６は塞ノ神式土器で、５は沈線、６は網目状撚糸文を施文する。７～９は縄文施文の土器である。10・11は轟式土器で、隆帯を施し、10は風化しているが、11は貝殻条痕が顕著である。12は押し引き文を施した土器である。13は船元式土器と考えられ、口唇部と突帯に刻目を施し、内・外面に縄文を施文する。14は並木式土器で、浅い凹線と刺突文を施す。15は南福寺式土器である。16は北久根山式土器で、肥厚した口縁部に斜線文を施す。17は西平式土器の胴部破片である。18は晩期深鉢形土器の口縁部で、19～22は磨研土器である。23・24は口縁を肥厚させた鉢形土器、25～30・32～34は粗製深鉢形土器の口縁部及び胴部で、貝殻条痕による調整が多くみられる。31は形式不明で、刺突連点文をもつ胴部破片である。35は径約９cmの平底の底部で、赤褐色を呈する。（荒牧）

〈弥生土器〉〔第10図36～42；図版５上〕

36～41は甕形土器の口縁部で、形態により４種類に分類できる。①平坦口縁で厚味があり、外側が丸いもの（36～38）。②口縁上部が凹んで大きく内傾し、外側はやや角張るもの（39）。③平坦口縁で内側へ大きく突出するもの(40)。④逆Ｌ字形の口縁で、その直下に刻目突帯をもつもの(41)。42は浅い凹みをもつ台脚状の底部である。

〈土師器〉　〔第10図43・44；図版５上〕

43の坏はゆるく外反する口縁部をもち、口唇部は丸味がある。外器面に粗いハケ目調整を施す。44は丸い胴部にくの字状に屈折する頸部をもつ壺形土器である。外器面は粗いハケ目調整、内器面はヘラケズリ調整を施す。　（吉永）

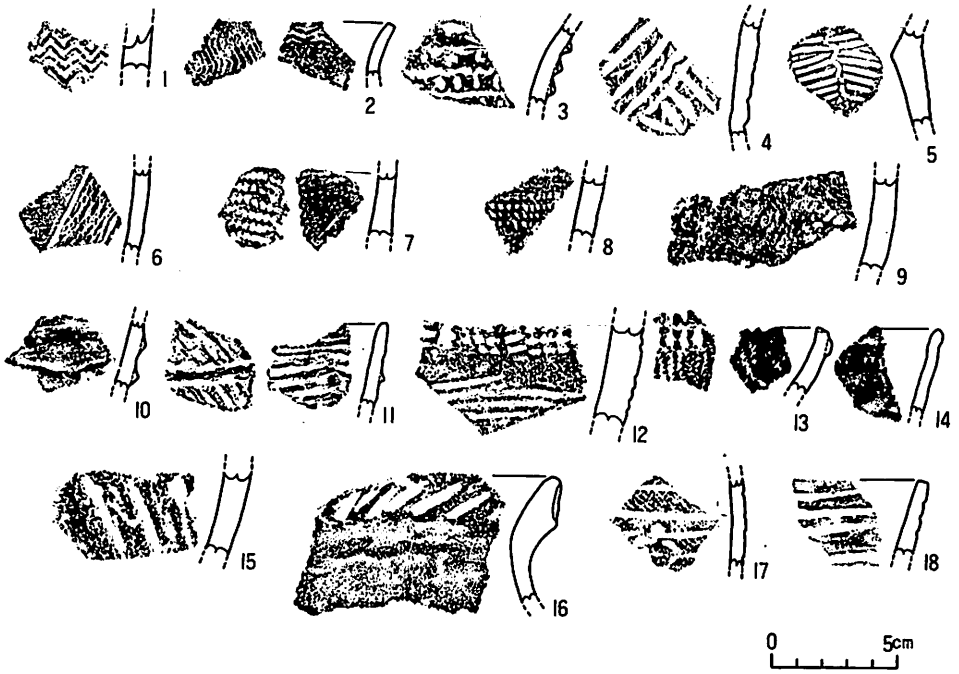
〈石器〉〔第11図；図版５下〕

打製石鏃（１～４）　１は剥片を利用した浅い抉入部をもつ小型鏃である。２は小さな抉入部をもち、加工は入念に施されている。中央部断面が厚いレンズ状を呈する。３は２に比べ小型の鏃で薄めである。４は駒形鏃に近く浅い抉入部をもつ。両脚の大きさが不均等で、また全体に厚めであり鋭利さを欠く。１～３は黒曜石、４は安山岩製である。

磨製石斧（５）粒子の細かな砂岩製で基部を欠失する。胴部と刃部の幅がほぼ等しく、刃部はいわゆる蛤刃である。横断面は長楕円形をなし胴部上面には敲打調整痕がみられる。刃部及び胴部下面は入念に研磨が施されている。

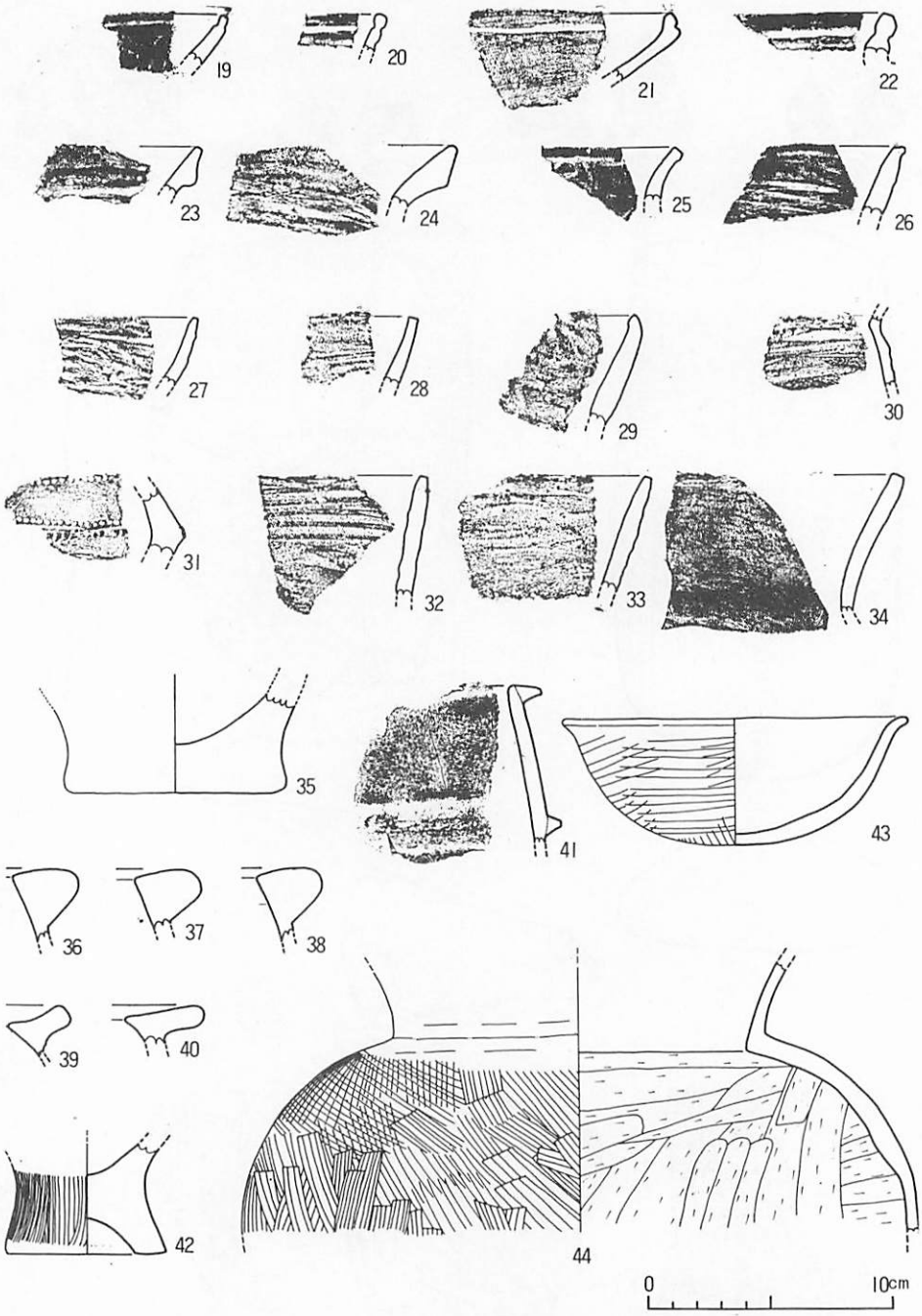
打製石斧（６）頁岩製で基部欠失。調整は全体的に粗く、階段状の打彫の痕をそのままとどめている。刃部は使用によって摩耗している。

石核（７）玄武岩質安山岩を使用自然面を打面にして各方向から剥離した後、剥離した面を打面にして不定形な剥片を剥いだ残核である。（吉永）



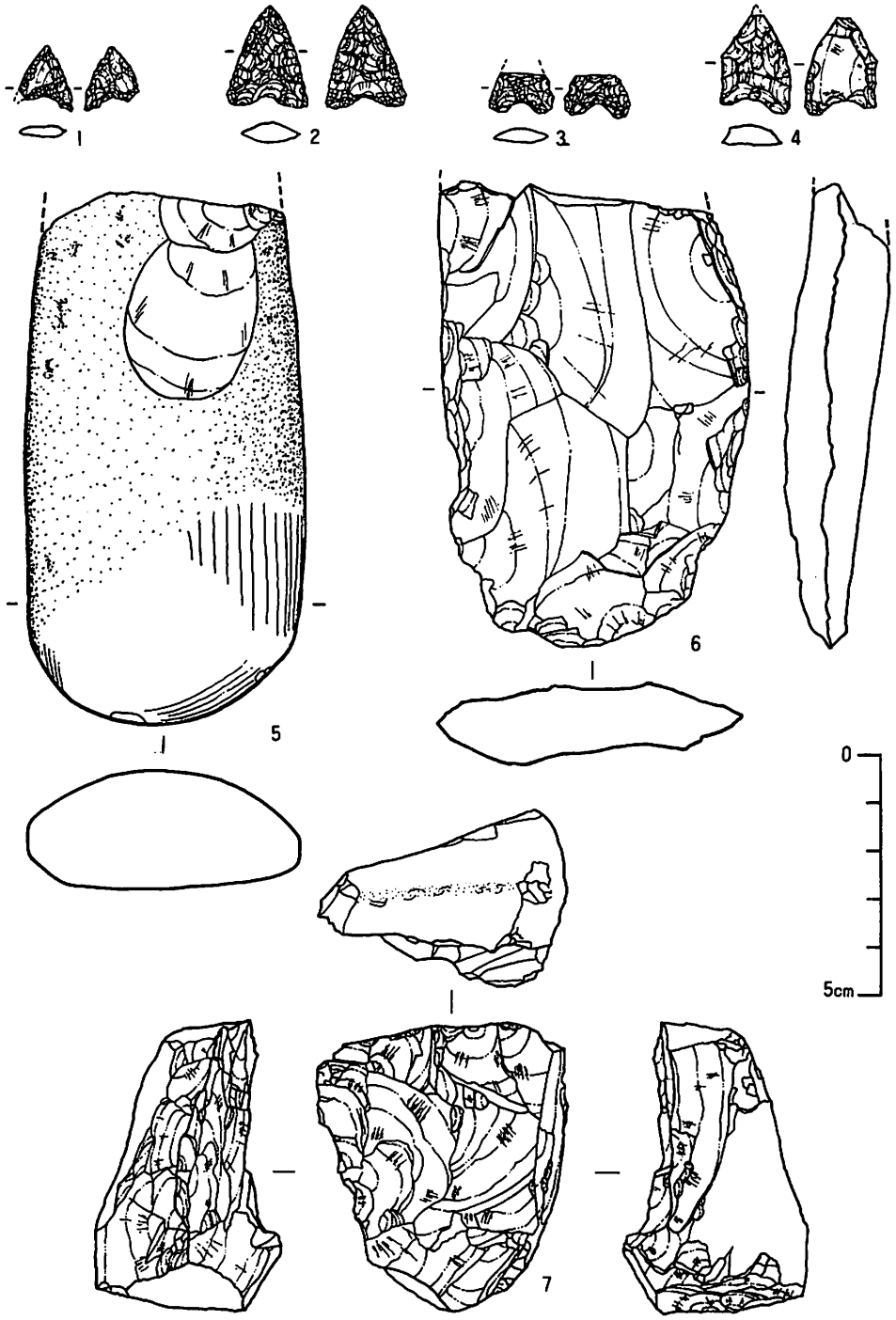
第９図　塩井社周辺遺跡縄文土器実測図

９・13；第２地点，　１～７；第３地点，　８・10～12・14～18；第４地点



第10図　塩井社周辺遺跡出土縄文土器・弥生土器・土師器実測図

40；第1地点，　20～22・25・27・28・30～33・43・44；第3地点，　19・23・24・26・29・34～39・41・42；第4地点



第11図　塩井社周辺遺跡石器実測図

1；秋田遺跡,　2・3・6・7；第3地点,　4・5；第4地点

付２　西原村内出土の縄文土器

第12・13図; 図版７の縄文土器は坂田義廣氏や故高橋弘氏による採集資料であり、西原村教育委員会に展示・保存されている資料の一部である。

１は同心円状のスタンプで押圧された、やや外反する口縁部の土器片である。

２は横の刻目突帯と横・斜行する数本の細沈線文の間に一連の刺突連点文を施した褐色の器壁の薄い胴部の土器片である。

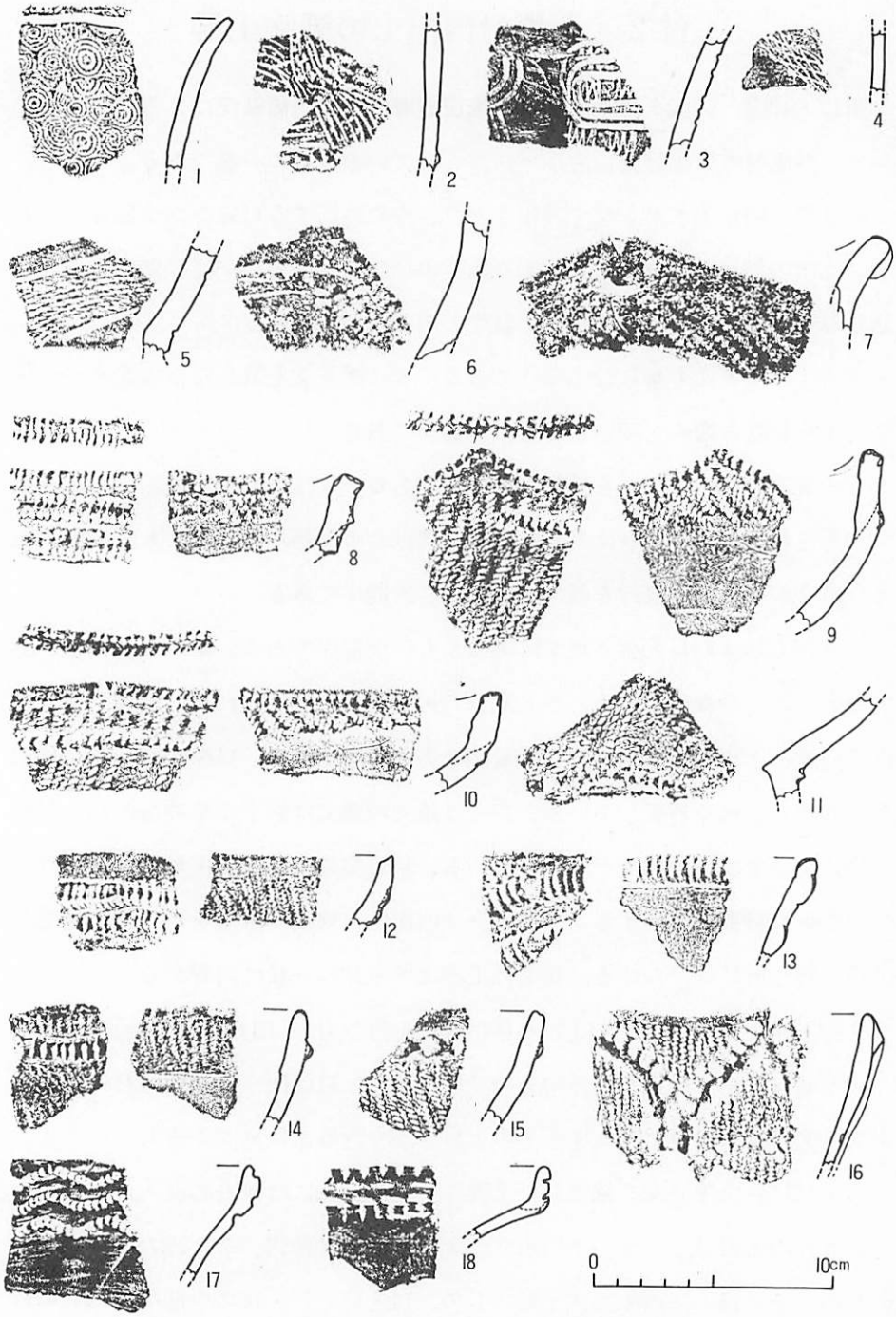
３・４は撚糸文を施した土器片である。３は撚糸文を施した後に数本の沈線文により弧状に曲線を描いた厚手の胴部片である。

５・６は縄文と沈線文を施した土器片である。５は斜の太い沈線文の間に縄文が施された、くの字状に外反する口縁部近くの土器片である。６は器面が粗く、縄文の凹凸部の痕跡を残す底部近くの土器片である。

７～16・19は刻目突帯と地文に縄文をもつ土器片である。胎土は黄褐色で脆弱なものと、暗褐色で硬くしかも光沢のあるものに分けられる。前者（７・19）は広い底部と短かい胴部を持つ重量感のある鉢形土器で、口縁部はわずかに山形に起伏し、軽く外反している。19では地文の縄文は胴下半部の横の刻目突帯を境に上下で原体の撚りが異なっている。刻目突帯は器体の上半部に限られ、また山形口縁部を境とするその向い合う四面は、蝮状の造形を持つ面と蕨風の表現を持つ面に分けられる。後者の土器はキャリパー状に内彎するもの（８・９・12・14～16)、やや直口ぎみの口縁部を持つもの(13)があり、11のごとくくの字状に屈曲する頸部を持つものである。９・11は同一個体と思われる。連点文は突帯部分のみに施文するものと口唇部や内器面に施文するものがある。

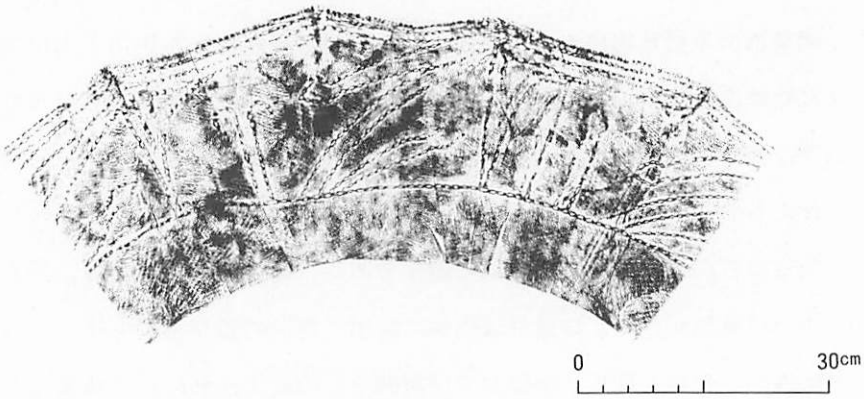
17・18は刺突連点文を施文した土器片である。18には滑石の混入がみられる。

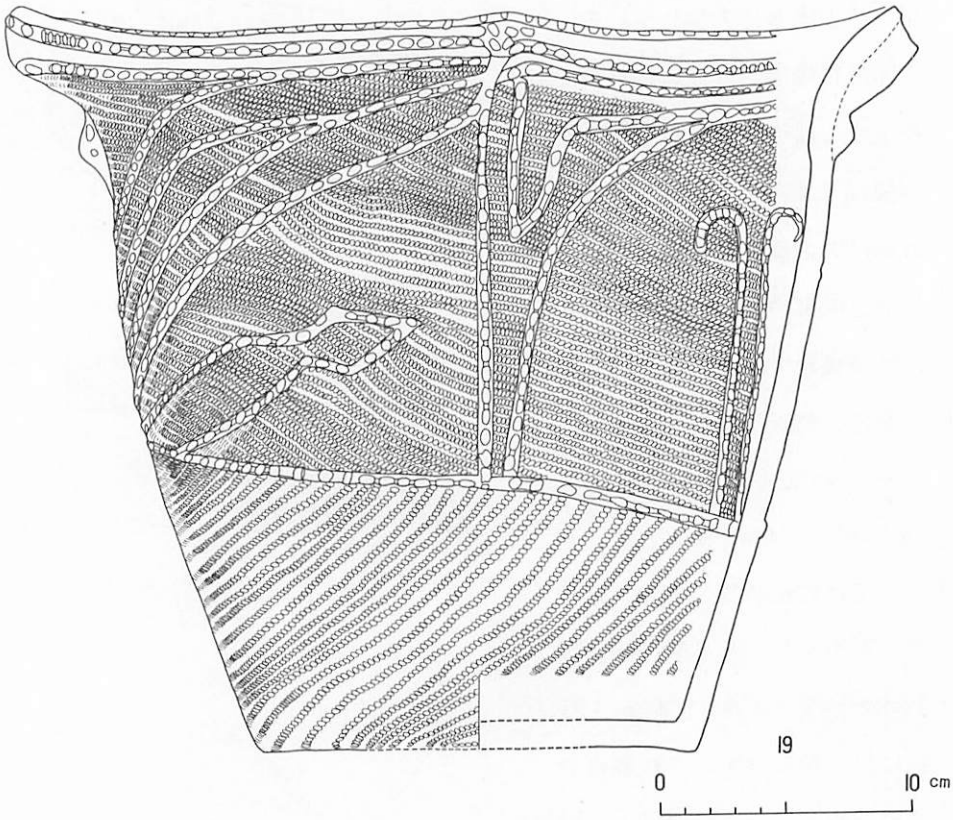
これらの土器は１・２の手向山式、３～６の塞ノ神式、７・19の平栫式土器のもの、８～13・16の船元式土器のもの、14・15・17・18の中期中葉のものの三つのグループに分けられる。なかでも19の土器は出土例が少なく、その文様の意味をあわせて注目されるべきであろう。　（中村）



第12図　西原村内出土縄文土器実測図(1)

1；西原村内，　2・3；袴野，　4・13・16；妙見，　5・14；出ノ口，　6；高山，
7・12；古池，　8・17・18；本屋敷，　9～11；別辻，　15；玉の迫





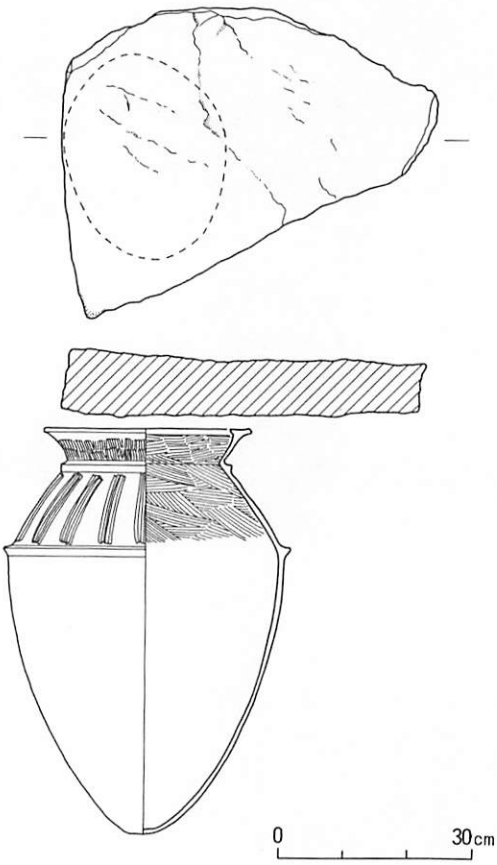
第13図　西原村内出土縄文土器実測図(2)　　19；桑鶴

付３　秋田原出土の壺棺

阿蘇郡西原村秋田出土。出土地点は西原村の南西部、布田川と木山川にはさまれた標高約190ｍの台地上にあり、秋田原板碑の南約10ｍのあたりである。遺物は西原村教育委員会の工藤大典氏によって道路開通後の切り通し面で発見されたもので、地表から約１ｍ下の黄褐色土層上部に斜めに埋置されていた。

遺物は石の蓋を持った黒髪式の壺棺である。薄手の卵形の器体に外方に開いた短い口縁部がつく。口縁部は内側に断面三角形の張り出しを持つ。口縁部外面に浅いハケ目を施し、頸部および胴部上位の最大径部には三角突帯を巡らしている。突帯との間には幅約５㎜のヘラによる暗文を5･6条を単位としてほぼ等間隔で施し、胴部突帯以下は粗いヘラ磨きで調整している。内面は口縁部から最大径部のやや上までは浅いハケ目を施し、胴部以下は横ナデを施している。底部は丸底に近い平底である。器面は胴部の黒変している部分以外は褐色である。胎土は砂粒を含み、焼成は普通であるが、ややもろくなっている。器高63.2㎝、口径32.4㎝を測る。

石蓋は安山岩製である。ほぼ三角形を呈し、長さ57.6㎝、幅42.8㎝、厚さ9.8㎝を測る。石蓋には壺棺口唇部との接触痕が明瞭に残っている(図版８)。(柳原)



第14図　秋田原出土壺棺実測図